地域資源を掘り起こす

自分たちに合った「見つけ方」を選ぶ

外部の驚く目や地域共有の価値を探す

㈲アグリテック代表取締役社長

中田　浩康

なかだ　ひろやす

東京農業大学卒業。1997年㈳農山漁村文化協会入り。2001年から北海道を拠点にフリーの農村ライターとして活動。03年アグリテック設立と同時に入社し、12年から現職。地域資源と観光を結び付けた「観光まちづくり」ビジネスを展開する。1975年栃木県生まれ。

地域資源の範囲はあまりにも広過ぎるので、事前にある程度、その資源を活用するための目的やテーマを絞っておいたほうがいい。前回は、そうすべき理由や「地域にある物」を「地域資源にする」ための働き掛け方などについて、私なりの考え方を紹介した。今回は地域資源の「見つけ方」について少し書いてみたいと思う。

地元の人に教えを請い地元を知るのが出発点

地域資源の探し方や見つけ方には、確立された手法や方法があるわけではないが、ここで一つの手法として「地元学」を紹介したい。提唱者は熊本県水俣市の吉本哲郎さん（地元学ネットワーク主宰）と宮城県仙台市の結城登美雄さん（民俗研究家）。「学」といっても学問ではなく「地元に学ぼう」ということで、自分たちが住む地域を足元から見詰め直し、地域おこしにつなげていく取り組みだ。私自身、前職時から結城先生とお付き合いさせていただく中で「地域には脈々と行われてきた営みと受け継がれてきた豊かな文化があり、そこにまず学ぶ必要がある」と教わってきた。まず地元の人々に教えを請い、地元を知ることから始めるということだ。

地元学では土地の人、つまり地域住民を「土の人」、そして地域外の人、つまり外部の人を「風の人」と呼ぶ。風の人が土の人に対し、普段の暮らし方や生きざま、地域の歴史などを尋ねながら、それを整理して地域の人々と一緒に価値を共有する作業を行うのだ。作業の鍵を握るのが風の人である。土の人が自ら地域を調査しても、普段通りに生活する身の回りからは、活用できる物はなかなか見つけにくい。一方、第三者である風の人は客観的にモノゴトを見ることができる。だから地域内に都市生活経験者や移住者、Uターンで戻ってきた人などがいれば、ぜひ調査チームに迎え入れてほしい。すると、われわれのような専門家もそこに入って話を整理しやすくなる。

地元学は、主に地域課題に解決策を見いだす意味合いが大きいが、聞き取り作業の中では、例えばその人がつくっている農産物なども話題になり得る。そこで自家用にしかつくっていない珍しい品種の農産物があったとしたら、これも地域で生み出される貴重な地域資源の発見である。それを共有し、栽培面積を増やしたり栽培方法を広めたりすることで、特産化したり加工品につなげたり、展開が広がる可能性がある。

このように聞き取りしたモノゴト一つ一つが地域資源となり、活用方法を見つけるきっかけにもなる。聞き取りの後の報告会でも、単に報告するだけでなく、ワークショップやイベントなどの手法を使って、関わった人を巻き込んで行うことが大切だ（**写真1**）。

地域外では珍しい物を「当たり前」の中で発見

ところで、この地元学を本格的にやろうとすると、少しプロジェクト的な活動や十分な期間が必要になってくる。そこで当社・㈲アグリテックは地元学の手法を応用し「聞く・見る・歩く・調べる（確かめる）」という作業マニュアルをつくっている。当社は地域資源を観光資源として活用することが多いため、どのような素材が観光プログラムに有効か判断する基準として、スタッフにこのマニュアルを使って整理させているのだ。

特に、当社に多い地域外から来たスタッフは、これによってまず地元を知ることができると同時に、意外な事に感動したり、喜んだりしている。私も栃木県出身の移住者だが、東川町に住んで20年もたつと、地元人と同じような感覚になることがあり、逆にスタッフから気付かされることも多くなってきた。

つまり、地元人は気付かないが、地域外の人からしてみれば感動したり珍しいと感じることがあり、それが地元にとっては当たり前の物を見つけ出すきっかけになる。このように地域外の人と一緒に地域資源を見つけ出すのは、よく使われる手法の一つだ。

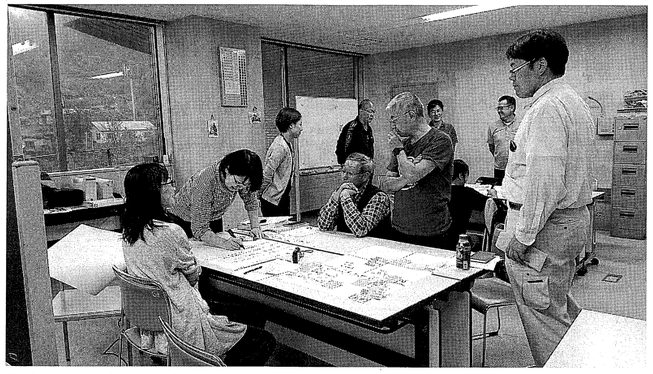

写真1　地域資源の掘り起こしを行うワークショップ

地元だけが知る物を磨き上げて資源化する

逆に、地域ではその地域資源的価値が十分に知られているが、まだ地域外の人には知られていない物の見つけ方もある。例えば、私がまちづくりのアドバイザーとして関わった石狩市。その北部の浜益区に「ルッツ」（**写真2**）と呼ばれる食材があるのをご存じだろうか。ユムシとも呼ばれ、浜益周辺では古くから食べられており、刺し身にしたりフライパンで焼くとコリコリした食感でおいしい。日本海が大荒れの日にだけ浜辺に打ち上げられる海産物で、地元でも年に1、2回お目にかかれるかという幻の食材だ。私も実際に浜益で地元の人から紹介されるまで知らなかった。

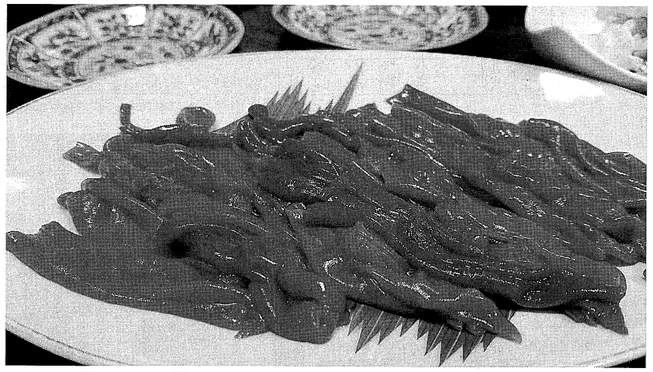

写真2　石狩市浜益区で食される幻の食材「ルッツ」の刺し身

浜益の人たちにとってルッツは貴重な食材であり価値のある物だ。ここに来なければ食べられない資源でもあり、地域のみんながその価値を共有している。このように地域に住む人みんながその価値を理解していても、地域外にはまだあまり知られていない物は、道内各地にたくさんあるのではないかと思う。それを活用するには、その価値にさらに磨きをかけて「地域資源化する」作業が必要になってくるが、このように地域共有の価値を探すことも、地域資源を見つける方法である。

他にも前号で紹介したように、「撮り鉄」や「秘境巡り」といったいわゆるマニアな人たちのニーズや社会問題にマッチしたものを見つけ出す手法もあれば、地域の〝1番〟（長い、短い、軽い、きれいなど）を探したり、「高い⇔安い」などの反対語の組み合わせや「雪→積もる→解ける→地下に染み込む→伏流水になる→大地を潤す→」などの連想で探したりと、地域資源の見つけ方はさまざまだ。課題やテーマなどを設定し、自分たちに合ったやり方で地域資源を掘り起こしてほしい。次回は見つけた地域資源の磨き方について書いてみたい。